

## 終刊の辞

経済学部教授 梅澤 精

『新潟産業大学人文学部紀要』の終刊にあたり、前学部長として一言ご挨拶を申し上げます。

本紀要は一九九四年新潟産業大学人文学部の開設と同時に発刊され、一四年にわたりこれまで二一巻を刊行して論文等一一〇篇余を世に送り出し、人文諸学の発展に微力ながらも貢献してまいりました。しかし、ここに来て大学をめぐる周知の厳しい状況その他から人文学部は閉鎖の憂き目を見ることとなり、同時に学部の紀要も終刊という事態にいたしました。

顧みれば、人文学部は新潟産業大学の二番目の学部として、初代学長金田一郎先生（農業経済学）、二代副学長川村克己先生（フランス文学）、初代人文学部長光益徹也先生（芸術学）らが中心となって構想され設立されました。当初の構想では、日本と欧米の文化を教育・研究する教養系の学部が計画されていました。新潟は柏崎の地に、教養の一拠点を構築しようという意気込みだったように記憶しています。しかし、当時まだ規制緩和政策がとられる直前の文部行政のパターンリズムによって、こうした計画は月並みであり、もつと新潟の地にふさわしい特徴的な学部をと強く要請され、結局、人文学部の名は残りましたが「環日本海文化学科」一学科の学部として出発することになりました。

開部当初は中目威博先生（中国文化）、安宇植先生（韓国朝鮮文学）、リディア・グロムコフスカヤ先生（ロシア文化）、加藤榮一先生（日本史、二代学部長）、田中榮一先生（日本文学、三代学部長）など錚々たる方々をお迎えして、華々しく出発したのですが、団塊ジュニアが通り過ぎた後の一八歳人口の減少は次第に深刻な影響をもたらすようになりました。そこで、内田安三学長（第三代）のとき、学科名にある「環日本海」

を欧米をも含む「地域」に拡大して「地域文化学科」とし、学生募集の間口を広げることで起死回生を図ろうとしました。これは大学経営の観点からの改革でしたが、同時に当初構想された教養系の学部という理念に遅ればせながら大きく一歩近づく結果になりました。また、学生数の減少は少人数教育という教育の理想を実現させましたのですが、定員確保にはなかなか届かず、また他の要因もあって、ついに学生募集の停止という事態にいたったわけです。

しかし、文化研究の火がこれで消えてしまう訳ではありません。教養教育自体は経済学部のみならず、なっても依然として大学教育の基礎であり柱であり続けます。同時に新たに経済学部、「文化経済学科」が開設され、今度は文化と社会との、とりわけ経済との関わりが教育研究されることとなります。この学科は人文学部教員の受け皿というだけでなく、ともすると秘教的になりがちな文学を社会に開き、さらに文化によって経済（とりわけ地域経済）を活性化していこうという構想のもとに作られたものです。個々の教員の専門は簡単に変えられるものではありませんが、この新しい学問である文化経済学に一肌脱いでみるのも意義は大きいと思います。人文学部の消滅と紀要の終刊は痛恨事に違いありませんが、大学の次のステージはもう始まっています。足もと（各自の専門研究）を固めつつ、顔を上げて前に進むしかないと思っております。旧人文学部教員の研究成果は引き続き『新潟産業大学経済学部紀要』に掲載されます。今後の研究活動をお見守りいただければ幸いです。

『新潟産業大学人文学部紀要』の長らくのご愛読、ありがとうございました。

（二〇〇七年四月～〇九年三月人文学部長）